

# 福崎町文化

第25号 平成21年3月31日 兵庫県神崎郡福崎町福田176の1 福崎町文化センター発行

『東広畑古墳』



# 「近代史のなかの辻川」

辻川歴史探検隊員 山田 栄



## 一、幕末・尊王攘夷運動と辻川

近年、歴史記述のスタイルが変わったように思います。例えば「百年に一度の経済危機」の言葉が流通していますが、大概の人が「1929年世界恐慌」を直接体験していません。教科書で習った「ウォール街の株式暴落」だけでなく、世界恐慌当時の具体的な生活体験をもとに歴史記述していくスタイルだと思えます。歴史の方向性を示すには難がありますが、人々の息遣いが伝わってきます（最近刊行された、小松裕著『「いのち」と帝国日本』や大門正克著『戦争と戦後を生きる』はそんな印象を残してくれました）。「近代史のなかの辻川」もそれを真似てみたいものです。

昨年6月29日「第1回辻川歴史探検隊」の活動として、松岡為一さんの記憶をもとに辻川界隈の探索がありました。その説明のなかで、「柳田国男生家跡」（展示民家ではなく標柱のある地点）をはさんで、北西に共栄軒と南にカミ山軒、二つの芸者置屋があったことを聞きました（元・法務局のやや西に共栄軒、その間に松岡さんの生家があって、水道ポンプを芸者さんと共用していたとのこと）。

いつの頃、辻川に置屋ができたのだろうか。辻川という地名の由来は、南北の「生野街道」と東西の「いなば道」（この表記は『福崎町史 第四巻』「一 近世の福崎」にある山論に記された地図によっています。柳田国男著『故郷七十年』には「鳥取と京都の間を通う際に、とくに途中で大阪を訪う必要があったとすれば、この街道が近道として選ばれ」、

上田秋成なども通ったと記されています）との交叉する所にありますが、その地の利から宿場町として発達するなかで置屋が立地したのではないようです。

江戸末期、1863（文久3）年の「生野の変」（地元では「生野義挙」、『故郷七十年』では「生野騒動」と記されています）の長州奇兵隊を主要メンバーとする二七人の道中をおつてみます。澤宣一・望月茂共著『生野義挙止其同志』によれば、十月二日長州・三田尻を澤宣嘉卿（八・一八クーデターで京都追放された七卿の一人）を先頭に河上弥一（二十才頃の若き奇兵隊総督）や平野国臣（筑前藩士で著名な尊王攘夷派志士）ら二七人が二隻の舟で出発しています。海が時化<sup>しけ</sup>たため大半は同月八日に網干入港、ただ北垣晋太郎（養父市出身で京都府知事・貴族院議員など歴任）は前日に飾磨に上陸して斥候<sup>しほ</sup>していたとされています。北垣はその夜に「新町（福崎町）」（当時であれば「新村」と思いますが、後述する大庄屋・武八郎も慶応の頃には「新町」とも記しています）に到着し、「京都代表」の進藤俊三郎（朝来市出身で横浜正金銀行頭取など歴任）と情報交換し、屋形の三

木屋吉兵衛方にいた本多素行（元膳所藩士で、養父の庄屋・中島太郎兵衛と農兵取立を画策した虚無僧）のところへ相談に行きます。歴史的には、薩摩・会津藩主導の八・一八クーデターによって、尊王攘夷派の決起を企図した「大和天誅組の乱」が破陣した状況が伝わってきたのです。北垣らは「生野の変」に決起するか否かのハードチョイスを迫られ、決起中止論に傾きます（当時の政治情勢は単に「開国佐幕or公武合体」vs「尊王攘夷」あるいは「南紀派」vs「一橋派」という將軍継嗣問題という図式で割り切るべきではないと考えます。『日本近代思想体系1 開国』によれば井伊直弼も「攘夷」の考えをもっていたことが紹介されています。幕府が培ってきた「鎖国1打払令」が大義とすれば、「攘夷」は権力者相互の温度差でしかないように思われます。長門藩らによる、幕府を巻き込んだ朝廷中心の攘夷決行路線、「総花的な攘夷運動」が破綻しはじめ、混乱した政治情勢に入ったことを示しています）。

さて北垣らが利用した道筋を考えられます。ご承知のように「銀の馬車道」は主として神東郡（市川の東側）を通り、江戸期の「生野街道」

を元にしていたと考えられるのですが、北垣らは必ずしもその「生野街道」だけでなく神西郡(市川の西側)の道筋も利用しています。一行の動きを再び、『生野義舉止其同志』で見ます。十月九日飾磨に入港し、翌日おそらく陸路によって、仁豊野の茶屋「奥田屋」に到着しています。仁豊野には問屋場(公的な宿泊設備)があり、その役人が姓名を改めています。澤宜嘉卿をいだく一行であるからか、「其中に判る」と答えずに「人足十七人」の先触を栗賀駅・猪篠駅に出しています(何とも傲慢な対応ですが、ここには辻川がでてきていません)。彼らは仁豊野で宿泊せず、そのまま市川西側を北上しています。というのはその道中、「溝口村で晒木綿六、七反」を購入していたことが伝わっているからです。

「(福崎)新村」から辻川へ、あるいはやや北から「井ノ口」へ市川を渡つたらしく、屋形と辻川に分宿することになるのです。

「奥田屋」で河上らの決起派と平野らの中止派は激論を交わしてありますが、その結果としての分宿ではありません。澤卿の「右毛左毛各有志ノ意ニ委ネン」態度を共有し、決起派に引きずられた“楯円形”のよ

うな一行なのです。宿泊の中心を辻川におけば、屋形よりも福崎新村とセツトで考えてもいいはず。『いなば道』は市川に分断され、その東西に宿泊施設があったと考えられます。『ふくさき史話』によれば、辻川には寛延三年から「宿屋」(松岡为一さんとの探索にあった「旅籠」と同一かは不明)を業とする一人がいました。また佐藤文太郎著『雞肋』には「(福崎)新町の宿屋樽屋」に姫路藩兵が本多素行をつれこんだとあり、福崎新村に「宿屋」が存在していました。しかしこれらの「宿屋」が“商人宿”と考えられ、公卿や多くの侍身分を含む一行が利用したと思われません。『ふくさき史話』に江戸中期以降の辻川を、「交通の要衝にあつたにしては商品経済のさほど進展していない、素朴な農村地域の姿」とうまく表現してあります。したがって、彼ら一行は屋形の「三木屋」(『やさしい市川町の歴史』によれば、屋形には江戸期に「三木屋」を含め九軒の宿屋があったとあります)と辻川の「大庄屋処」(あるいは東三木家・山崎組「大庄屋処」)とに分宿したと考えられます。このことは『福崎町史 第四巻』の「二 姫路藩山崎組大庄屋日誌」

に裏付けられるはずですが、記録は「文久二年二月二十九日(文久三年(1863)九月一六日)までしかありません(直後の「生野の変」前後の記録はなく、次は「慶応元年(1865)七月一八日となっています)」。また記録から「宿屋」の存在を探してみましたが、筆者の東三木家・武八郎が姫路に出張して泊まる「町宿」がほとんどで、「慶応元年二月一三日」に「福崎新村弥之助召出候処、郷宿二而和談行届」があるだけです。そして「文久三年七月六日」に「生野代官御帰候二付、辻川御泊」とあるのは、「辻川大庄屋処」と読めると考えています。

一行は分宿した二日後、十月十二日に生野代官所を占拠して“生野義拳”に決起します。かねて北垣らが準備していた「農兵取立」に結合して尊王攘夷のために「胆ヲ張り身ヲ抛ツ」たのです。その檄文は多田弥太郎(出石藩士、うまく京坂に潜伏するが翌年養父市の浅間峠で暗殺される)が起草したといわれています。柳田国男は『故郷七十年』「私の生家」に「私の祖父の陶庵というのは隣村川辺の中川という家から養子に来た人である。……陶庵は気概ある人で、有名な生野騒動の黒幕と

なって檄文を起草したりもした」とも記していますが、離縁された陶庵が尊王攘夷派に加担する立場にあったことを伝え聞いていたのだと思います。しかし翌十三日、出石・姫路両藩出兵の情報によって“破陣”することになります。脱出できた澤卿らもいたが、平野らは捕縛され、河上等は取り立てた農兵等に囲まれ自決します(奇兵隊を中心とする河上ら十三人の終焉の地が「鉱石の道」近くの「靖国神社」として残されています)。また中島太郎兵衛(養父出身で農兵取立に尽力した豪農)らは逃避行の途中で宍粟や猪篠の農民に殺されることになりました。

かといって当時の民衆が尊王攘夷に反対していたわけでもなく、開国佐幕に賛同していたわけでもありません。「二 姫路藩山崎組大庄屋日誌の文久三年十六日に、世情騒乱故に「江戸詰御中間人足組当一七日ニ書出候様御用状」が届き、山崎組も応じています(武八郎の記録には、尊王攘夷派・姉小路卿襲撃事件の犯人探索の「御達」を六月三日に受け取ったこと、「夷船と夕、カイニ相成候」と六月廿一日に長州下関砲撃事件があったこと、なども記していますが事務的に読めます)。六月に

はその内の一人「(溝口村の) 太右衛門」が「唐人頓夏」の鉄砲を隠匿する「不調法」で召し捕られています。鉄砲を隠匿した彼の行為には、攘夷や開国よりも同郷への「みやげ」であったように思われます。江戸で「腰なわ」になった彼は「焼切」って逃亡していたのです。

五月十四日には「此度異国打払二相成……献金可致」ことになりませんが、七月になっても溝口村の二人が承服せずに大庄屋・武八郎が説得する有様です。武八郎の記録では、村の利害や芝居興行についての方が切迫感があります。例えば八月十一日の「坂戸村若者四人、田口村若者四人召出、他領もの引入芝居等いたし候義取糺候」という類の記録が散見しているのです。

そういう状況であったからまた、「生野の乱」の鎮圧に繰り出された姫路藩兵(市川西を二百騎・市川東を三百騎、総勢千人ともいわれる)に驚きの目を向けたと思われまます。「素朴な農村地域の姿」をした辻川に「置屋」が立地するようになるには、幕末から何年か経過しなければなりません。神東郡役所は明治十九(1886)年福崎に移転す

るまで屋形にあったことは象徴的です。柳田国男は『故郷七十年』「母の思い出に」に、「要処要処の大きな(人力車の)立場だけは、大抵はきれいな茶屋、又は旅館に従属するようになり、私などの七つ八つ頃(明治十五、十六年)には、もう少しずつ所謂脂粉の気がただよい始めて居た」と記しています。「辻川大庄屋処」の門扉を削ることもなった、明治九(1877)年「銀の馬車道」完成に象徴される商品経済の進展が辻川を底上げし、二軒の置屋を形成していったのだと考えられます(図版にあります明治二四年の福崎の地図には市川に架かる橋梁はまだ見えず、渡し舟の記号があります)。

## 二、明治初年「解放令反対一揆」と辻川

明治四(1871)年、辻川組三木大庄屋で始まった「播但一揆」は日本最初の「解放令反対一揆」です。その前に「生野の乱」で気になってきたことを付け加えさせてください。

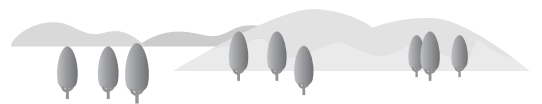
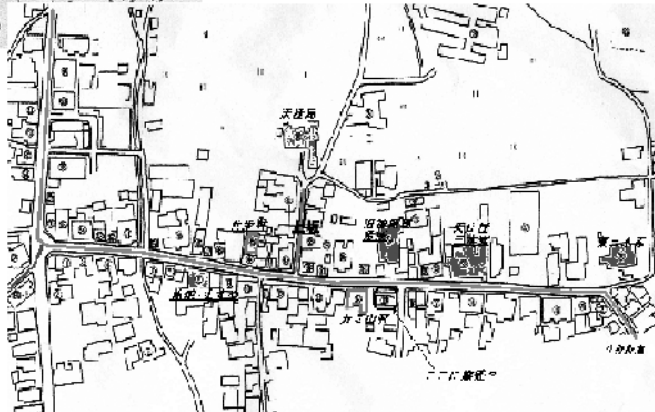
“河上ら十三人の終焉の地が「鉱石の道」近くに「靖国神社」としたのですが、十三人に含まれていない「(河上の) 僕・徳蔵」の行く末が

曖昧なのです。試写会(公開されなかったと記憶していますが……)でみた、須藤久監督『歴史よお前は誰の為に』(一九七一年製作映画)では、「僕・徳蔵」が被差別部落出身で屠勇隊(奇兵隊の内の一隊)の一員であったとされています。先行研究は「僕」の立場でしか記述されていなかったたので、驚きました。(以下未了)



←明治24年の福崎  
(『福崎町史 第四巻』「付図Ⅱ」より)

↓明治初期～中期の辻川  
(第1回・辻川歴史探検隊の資料にプロット)



# 「吉識雅夫の幸運な一面」

吉識 恒夫（雅夫 長男）

## ・はじめに

吉識雅夫は東京大学教授時代に、「船舶の大型化に関する船体強度の研究」を幅広く行いました。その中で、第2次大戦前の軍艦「大和」などはリベット構造でしたが、船体を溶接構造とし建造効率の向上を目指し、種々研究を重ねました。溶接基礎技術の研究を行う中で、ブロック建造方式とする船体組立て方法を考案しました。後に、その成果が我が国造船業に広く採用され、世界一の造船王国へと導きました。数々の研究段階では、大学などの多くの研究者、業界の多数の技術者と共同で作業を進めました。研究成果が広く活用され、我が国造船業の発展に寄与したことが認められ、文化勲章を授与されました。この栄誉を称え福岡町より名誉市民の称号を与えられ、遺族としても大変名誉な事で、常日頃感謝いたしております。

この度、吉識雅夫生誕100年を

記念して、福岡町では青少年の科学への関心を深める趣旨で「吉識雅夫科学賞」を設置されました。誠に光栄に存じている次第です。この機会に、父に関する思い出を、述べて欲しいとのご要請がありました。どのようなことを記述すればよいか、なかなか思い浮かぶことはありません。職歴は既にご承知の通り、東京大学教授・大学退職後日本学術振興会理事長・宇宙開発委員会委員長代理・東京理科大学長などの要職を、数多く経験させていただきました。それら要職での業績以外の日常生活面などの一部につき、思いつくままに2〜3列挙いたします。

## ・若い時代の個性

大学教職時代のある振る舞いに触れてみます。大学教授という職業柄、一度筋道を決め行動を起こすと、その決定を簡単に改めないのは当然のことかも知れません。度々自分の主

張を押し通す様子を、多くの方が語っておられます。特に、学生へ接する場合、この厳しい態度を取ることで、学生からかなり恐れられていたようです。大学退職後は、研究・教職と異なる要職に就いたので、自分の意見を強く押し通せる境遇には必ずしもなく、適宜譲歩を認め変化して行ったように思います。この意志強固な態度を示す場合、大声で怒鳴り散らすと言う陽的な態度ではなく、多くを語らず沈黙に近い状態で、眼光鋭く睨みつけると言う態度が多かったようです。単に睨みつけるのではなく、眼鏡のレンズを通して見える眼光の鋭さが、怖さを象徴していました。我々子どもたちには、それ程厳格に言葉に出して叱る事は多くありませんでしたが、睨みつけられるのは度々で、通常と異なる怖さの思い出は多々あります。怒鳴り散らす様な怒り方ではないので、どうしても短時間で気分転換する性格では必ずしもありませんでした。

## ・飲酒との出会い

通常の日常生活ではさほど気難しいという事はなく、温厚なタイプでアルコールが入ると結構陽気になり、

時には深酒をして酔いつぶれてのご帰還も結構ありました。生まれつきの体質は、どちらかと言えば飲めないタイプであったと、度々聞かされました。飲酒を好むタイプに変わったのは、大学教職の道を選んだことに関係しています。大学教職生活に入り、直接ご指導いただく先生が大変お酒好きで、先生のお供により飲酒機会が増し、徐々に酒量が増加していったようです。お酒の飲み方などさまざまの教訓も多々受け、多くの方々との接し方にも変化が現れ、交流の場が広がったようです。研究面など頑固と思われる性格も徐々に影を潜め、多数の方々からの援助・



協力が得られ易くなり、研究成果にも良い影響を与えたように思われま  
す。社会から広く評価を頂いた業績  
は、多数の方々の援助・協力がなけ  
れば、当然叶えなかったと思います。  
ご指導頂く先生との出会いは、人生  
に多大な影響があったと言っても過  
言ではないようです。

### ・人生の岐路となった罹患

大学教職の道を究極選択したので  
すが、実は本人の本来の希望ではあ  
りませんでした。卒業論文作成時期  
に「チフス」を患い、長期の病気療  
養生活から逃れられなかったことが、  
大きな要因です。病気療養中に希望  
する造船会社の入社試験があり、受  
験の機会を失ったようです。大学を  
卒業する前年の1929年（昭和4）  
は、現在起きている金融危機と同様



な金融大恐慌時代で、社会は大不況  
期にあり、東京帝国大学卒業生でも  
大変な就職難の状況にあったよう  
です。企業への就職が出来ず困り果  
た状況にある時、先に述べた先生か  
ら大学での教職の道を進められ採用  
頂きました。その結果、学究をはじ  
めさまざまな人生教訓を学ばせてい  
ただいたことが、運命の大きな分か  
れ道であったと度々聞かされました。  
この幸運を呼び込んだ運命が、自叙  
伝『運鈍根』の表題として選んだ大  
きな理由の一つとされています。

本人の身体健康状況は、必ずしも  
頑強なタイプではなく、大学卒業時  
の大病以外、京都府立二中受験時に  
も、原因不明の高熱が続き家族一同  
不安があったようです。何とか試験  
の一週間前にどうにか起き上がるこ  
とが出来、受験に間に合い運良く合  
格出来たようです。しかし、2年生  
への進級時に父の東京転勤があり、  
またまた東京の中学校への編入試験  
を受けねばならぬ状況になったよう  
です。転校志望先として、東京府立  
一中（現東京都立日比谷高校）を第  
一志望、第二志望を東京府立五中（現  
東京都立小石川高校）とし受験に挑  
んだようです。この受験は編入試験  
であるので試験日が同日でなく、

第二志望校の試験が先に行われたよ  
うです。本人の自己採点結果では合  
格は無理と思っていました。運良  
く合格が決まり、第二志望校では  
あったが入学を決断したようです。

この転校も結果として大変幸運を呼  
び込んだと聞かされています。府立  
五中は当時新設間もない学校で、新  
進気鋭の先生が多く、特に数学・物  
理に関する授業の密度が高かったよ  
うです。これが後の工学・理学の道  
へ進む大きな役割を果たしたよう  
です。同級生から4人の工学・理学系  
東京大学教授が輩出されたことは、  
中学（現中・高校）に於ける教育が  
如何に大きな影響を与えるか、この  
事実を見れば納得出来ることです。

### ・野口式整体療法とのめぐり合い

人生経歴に大きな影響を及ぼす進  
路の分かれ道で、本人の病気罹患が  
大きな影響を与えていることは先に  
述べた通りです。決して病弱な身で  
はありませんでしたが、社会生活  
に入ってから健康面には種々気を  
配っていたようです。当時は現在の  
ような西欧医学が必ずしも発達した  
状況ではなく、薬品類も良薬に恵ま  
れて居たとは思えません。どちらか

といえば東洋医学に頼る人が、結構  
多かったのではないかと推測します。

西洋医学も当然受けていたと思いま  
すが、特異な超能力による治療方法  
を持ち合せた「野口晴哉先生」にめ  
ぐり合い、療法（治療）を受けるこ  
とになったようです。以後長くこの  
療法に深い関心を持ち、療法を受け  
ると同時に、野口先生の理念治療方  
法の発展に協力して居りました。

どの様な境遇・めぐり合わせにより  
先生に出会うことが出来たか定では  
有りません。「野口晴哉先生の整体  
理念」との関わりを、自叙伝『運鈍  
根』に「自分の人生を生きてゆく上  
での心の持ち方、健康に対する心構  
えなどにつき大きな影響を受けた」  
と記しております。

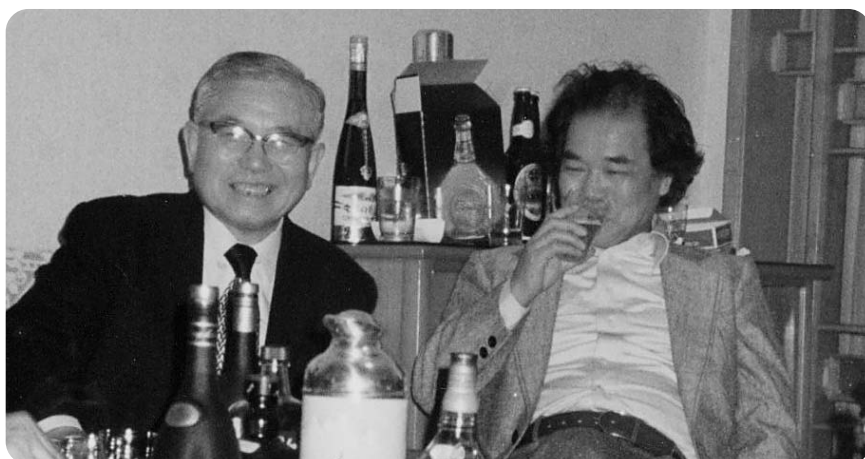
野口先生が持ち合せた特異な超能  
力を最初に発揮されたのは、192  
3年（大正12）に起きた関東大震災  
の時です。当時先生は小学校6年生  
の12歳でしたが、罹患した患者を多  
数救済したことに始まるようです。  
これを契機に先生は、医学書の研究  
を始め、健康法につき独自に探求し、  
1926年（大正15）東京入谷に道  
場を開設し、治療・講習会を開始さ  
れました。当時、先生の治療方法は  
患者の患部と思われる箇所を特異な

超能力により見出し、その箇所を手を触れ、愉気（精神を集中し気を通す）を行うことで患部の治癒に当たられたようです。しかし、先生の本来の健康法理念は、患部の治癒が本来の目的ではなく、人間の生まれつき備えている自然に生きる力を、どのように引出してゆくかにあるようです。自然界の動物は、自らの日常生活の中で自然に生命力をつけ生きてゆきます。しかし、人間は社会の種々な外的要因により、体内に潜んでいる自律治癒力を引き出し難く、健康維持を阻害しているとの考え方です。先生は多数の人々の日常行動の観察、あるいは患部治療経験などにより、人間の体型を幾つかに区分けし体内に潜む自律治癒力の引き出し方法を見出されました。

体内に潜む力の引き出し法につき、講習会などを開催し伝授を開始されました。組織を結成しこの理念を社会に広く伝授すべく、第2次大戦中から戦後にかけて活動を開始されました。先生がこの活動を開始される時点で、『運鈍根』に記した自分の健康に対する心構えの面から、積極的に先生の活動に参加、ご援助することになったようです。先生は独特な観察力により、個人の体型と内部に潜在する自律治癒力との関係を構築されました。しかし、先生の考案された理念に、自分の得意とする工学的な手法を具申し、整体操法の拡張に協力したようです。この体癖別整体操法の確立により、組織を「整体協会」に改名し、1956年（昭和31）文部省の認可を得「社団法人整体協会」が発足しました。発足と同時に全国的な組織展開が行われ、野口先生が会長に就任されました。この組織の発足と共に全国広く、活元会、愉気法講座、整体指導講座などを開き会員が増加して行きました。先生は1976年（昭和51）享年64歳で永眠されました。先生が逝去された後も積極的に整体協会の発展に協力し、1986年（昭和61）から1993年（平成5）逝去するまで整体協会の会長を引受けておりました。整体操法の理念に共鳴し、健康を導く活元運動、愉気操法を日常行っておりましたが、晩年老化が進むにつれ自然の生命力も衰え、糖尿病・パーキンソン病に悩まされました。しかし大学卒業までの罹病を考えますと、整体操法との出会いが、享年85歳の長寿達成に大きな影響があったと思われまます。

## ・あとがき

生前、自分の人生に最も影響力ある事柄は、大学の教職の道へ進んだことであると度々聞かされました。その概要については前述しましたが、大学の先生のご好意がなければ実現しておりません。しかし、先生のご好意だけでその後の人生、全てうまく行くわけではないと思います。やはり本人の能力と努力の積み重ねがなければ達成できません。東大教授としての職務を果たす能力については、中学時代に数学をはじめとする理系の科目につき努力を重ねた実績によるところが大きいと考えられます。自分が手にした幸運をどの様に活用してゆくかは、すべて自己の能力と努力にあると思います。従って、本人も人生を振り返って、自叙伝を著し表題を『運鈍根』としたものと思います。



# 随想「日本の食文化」

庄 幹 正



20年秋 パリ・セーヌ河  
船上にて

(一)「福崎町文化」には今迄二度(12号、13号)、法理論・法文化と囲碁文化について寄稿した。此度またご依頼があつて標記題目で書くことにした。このテーマ相当の中味のあるものが書けるかどうか、甚だ心許ない。このことについて今迄に特に勉強をしたことがないし、本すらまともに読んだことがない。ましてや職人的経験とか食関係の業務など全くしたことがない。それならなんで書くのか、書けるのかと問われるに違いない。…とここで、私の家は地域では非常に長く続いた家だが、もと百姓で、私は子供の頃から農業に親しんできた。従つて農業や食については特別の意識をもつていいこと、戦中、戦後から今日までの農

業政策や食糧問題についての変遷を見てきたこと、昨今内外に食の問題がクローズアップしたこと、個人的には出身校や職場が阪神で、とりわけ食の街大阪では何かと食の機会が多く、考えさせられることが度々あつたこと等々が大方の理由である。こんなわけで私の経験と感想とそれに幾分考えを加えてぶつつけ本番、自分流に書いた次第である。なおついで乍らいえば、何かを書く度に思うことだが、書いて自己主張するだけで満足したくない。人々に先ず読んでもらひ、興味・関心をもつてもらつて、更に何かを得てもらうことができたならこれに過ぎたる喜びはないと思う。極力努めたい。

(二)近年、世界的な食糧高騰や輸入食品の安全性や商品の偽装表示等種々な食問題が顕在化した。人間の生存・生命に係わる食の問題は何時でも何処でもこと重大である。マクロ的にいつて人口増加と食糧生産との関係は昔から理論化されている。加えて地球の温暖化や気象異常等により、今後は世

界的に食糧問題が益々厳しさを増すだろう。先進諸国の中で稀にみる食糧自給率40%以下の我が国は食の安全保障上大きな不安を抱えている。しかも為政者も国民も危機意識が稀薄であるように思えてならない。確かに世の中は何処へ行つても食物は街に溢れ、食物屋は軒を連ねる。国民は飽食で、ぜい沢となり、家庭でも何処でも食べ残しの山ができてゐる。人々は豊かさに慣れてその中に埋没してゐるのだ。かのイソップ物語の「アリとキリギリス(又は甲虫)」の寓話を思い出さずにはいられない。

私は近年、アジア、アフリカ、ヨーロッパの九カ国へ旅をした。世界三大料理の国たる中国、フランス、トルコも訪れた。私は街中の比較的高級そうなレストランで食事をして気付いたのは意外に質素だった。メニューでは料理の種類が少なく、調理も味も必ずしも満足するものではなかった。初めての国の、数少ない経験で、その一部を食しただけで全体を判断することはできないかも知れない。他方我が国では、戦中、戦後の食糧難時代があつたものの其後の経済成長に伴い、今日豊かな食生活と食文化をもつに至つた。今が盛りの日本の食文化、とりわけその料理文化を中心にみていきたいと思う。

これが本題である。

(三)これに先立つて、町文化について少しふれておきたい。町民憲章には、「豊かな伝統と歴史を守り、教養を深め、香りたかい文化の町をつくりましよう。」とある。町文化協会規約には、「この会は、福崎町の歴史や伝承を大切に、その上に立つた新しい文化の創造に努め、町の発展に尽くすことを目的とします。」とある。「福崎町文化」はこうした方向に沿つて発行されているのであろう。既刊23号、その内の幾つものものが手許にあつたのでみたところ、次の如き項目の寄稿があつた。柳田民俗学関係の紹介が圧倒的に多く、他に三木家、辻川界わい、遺跡、社寺、祭り、民謡、方言、山桃忌、文化祭、美術展、老人大学、各クラブ活動、町史等、当然のこと乍ら地域文化に関するものが多かった。手づくり料理、郷土料理について書いた「食の文化」考(17号)には目をとめた。

元来文化は人間の全活動の歴史的所産である。それは学問、芸術、科学、宗教、道徳など高い価値的所産だけではない。社会生活の中で、或いは生産活動の中で生まれ、受け継がれてきたものも文化なのだ。私達は地域の歴史や伝統や伝承にある文化を守るとともに、普通の、日々の暮らしや生産活動



の中から新たな文化の創造に努めた  
ものである。今福崎町商工会では、  
平成20年度地域資源全国展開プロジェ  
クトを実施中で、そのパンフレット『も  
ちむぎばすた』食べ歩きマップには、  
町内各店自慢のもちむぎ食品や料理  
が紹介されている。福崎発特産の「も  
ちむぎ」が地域食文化の旗手として前  
進してほしいものだ。またみんなが知  
恵を出し合って、新たな料理や味を開  
拓してもらいたいと願う次第である。

(四) 本題として、食の料理文化につ  
いてみたい。食材、調理方法、調味、食  
器、膳の各点からみる。

① 食材。我が国は国土の位置や地勢上  
から自然的諸条件がよく、新鮮で豊富  
な海の幸、山の幸、里の幸に恵まれて  
いる。また近年輸入食材が増加し、内  
外の食材の豊富さは世界有数である。

② 調理方法。極めて多彩である。煮(焚)  
物、焼物、蒸物、茹物、揚物、焙物、炒物、  
燻物、干物、酢物、生(造)物、和物、吸(汁)  
物、漬(香)物等がそれである。調理に  
こうした様々な方法が編み出された  
のは、豊富な食材に恵まれたことや米  
麦を主食としてきたことと深く係わ  
っていると思うが、主たるわけは矢張  
り先人達の創意と工夫、不断の努力に  
ある。

③ 調味。概してシンプルな味付けの外

国と比べて日本人は味覚が繊細なせ  
いだろうか味に凝る。日本人が造り出  
した発酵食品の味噌、醤油、酢、味醂等  
は味わい深い調味料である。なお外来  
物でも日本人向きにかえたり、或いは  
種々ミックスして複雑な味にアレン  
ジするという器用さが日本人にはある。

④ 食器。種々な材料を使った、優れた  
加工技術による食器が多い。またその  
形も多種多様である。陶器、磁器、土器、  
木器、竹器、鉄器、銅器、鋳物器、アルミ  
器、合金器(真鍮器)、ガラス器、プラ  
スチック器等がそれであり、その形も  
多様である。壺型、碗(椀)型、鉢型、皿  
型等があり、更にまた、丸型、楕円型、  
角型、菱形等がそれである。また無地  
ものと色彩ものがあり、そこに文字入  
りや静物や風景を描いたものがある。  
要するに、先ずは目で見て味わう日本  
料理では、食器もまたそのエッセンス  
の一つである。

⑤ 膳。配膳の妙がある。食器と盛付、各  
食器の配置等、膳部にバランスがあり、  
一種の秩序が保たれているようだ。日  
本人は生け花において季寄(歳時)を  
表現したり、自宅の庭に小自然を造る  
ように、配膳の内は何らかの価値が表  
現されているのではあるまいか。

(五) 料理の具体例。一つの食材をメ  
インに如何に多くの料理が作られる

か、味の王様、河豚と蟹について、道頓  
堀の「づばらや」と「かに道楽」のメ  
ニューを紹介し、次いで河豚の本場関  
門と蟹の本場北陸と山陰の珍しいメ  
ニューを紹介する。

先ず、河豚では、てっちり、てつき、  
焼ふぐ、ふぐの(天麩羅、唐揚、にぎり、  
うどん、サラダ)、皮ちり、湯引があり、  
ふぐ白子の(天麩羅、塩焼、にぎり、ゲ  
ラタン)があった。次に蟹では、かに(焼  
茹、酢、造、天麩羅、唐揚、味噌甲羅焼、  
すき、しゃぶしゃぶ、グラタン、サラダ、  
シューマイ、コロツケ、茶碗蒸、雑炊、  
味噌にぎり、太巻、胡瓜巻、バツテラ、  
ちらし)とあった。なおふぐの本場関  
門、かにの本場北陸、山陰では更に工  
夫をこらし、上記メニューとは別の珍  
品がある。ふぐでは、ふく焼に香草、木つ  
葉、味噌、抹茶、クリーム、ピーナッツ、  
雲丹を加えたもの、ふくの(ステーキ、  
たたき、たたきカルパッチョ、一夜干  
炭火焼、湯葉焼海苔巻、辛子明太塩辛、  
七味揚、竜田揚、ひれ中華風うま煮、に  
ごり、身皮雲丹まぶし、皮雲丹和、身  
皮もずく和、鉄皮春菊和、シューマイ  
あん掛、カラーゲン雑炊、酒(茶碗)蒸、  
そば蒸、西京漬、松前漬、ひれ酒、赤汁、  
木の子スープ)、ふく白子の(焼、味噌  
焼、酒蒸、豆腐、みぞれあん掛、饅頭、中  
華饅頭焼目)、ふく白子豆腐の(揚出、

柚子味噌焼、雲丹ソース)等である。か  
には、かにの(具足煮、治部煮、酒香  
焼、爪紅葉焼、宝楽(徳利)蒸、雲丹い  
くら井、身絹田巻、湯葉包、スープのパイ  
包、蕪べつ甲あん、身あん掛、かに酒、  
赤出汁、牡丹汁)、かにの(味噌豆腐、甲  
羅とろろ寄、ゼリー掛、白和、木っ葉和、  
みぞれ和、昆布切干はりはり漬)等が  
ある。商魂、商才にただ驚嘆するばか  
りである。

(六) 今春、'09食博覧会・大阪が開か  
れる。テーマ館は「はつらつ」、「ときめ  
き」、「ふれあい」、「うるおい」、「もてな  
し」、「にぎわい」、「あじわい」の七つで  
ある。思うに食は人々との出会い、交  
わり、もてなしの心で味わってこそ心  
にも身にも潤いと元気をもたらすと  
いうわけだ。これぞ食文化の真髄とも  
いえる。

(七) 最初に述べたように食の安全  
保障・食環境に不安があるというのに  
世の中は飽食で、天下太平だ。氷上の  
酒盛りに似た思いがする。しかし他方  
日本の食文化、料理文化の素晴らしさ  
には賞賛を惜しまない。その美味しさ、  
新鮮さ、多彩さ、豊かさ、優雅さ等は  
わば一級の芸術品なのだ。

私達はこれを誇りにして、守り、伝  
え、更に発展させていきたい。

## 「永遠の平和を願って」

福寿学園 陶芸部 真田 晃

このたび第26回神崎福寿老人大学祭に臨んで、私に体験発表をお願いしたいとの指名を頂きました。とても私にそんな席で皆さんにお話し出来る話芸も語学もないのに、聞いて頂ける様な発表体験もないので、お断りしたのですが、是非にとのことで、それでは私の唯一心底に残る太平洋戦争に参加して、残虐悲惨を見た体験では如何でしょうと言うことでお受けした次第です。因みに私のこの主旨は、この体験を私たち生存した者が、機会有る度に悲惨の事態を次世代に語り次ぐことで、今の平和を持続する事を願って、僭越ながら記述させて頂くことになりました。

## 一、入隊から中国の17ヶ月

自分の兵歴は当時称して昭和16年兵で、招集により昭和17年1月に岡山工兵十七連隊後ろ月七三八八部隊となるに入隊して、初年兵教育を受けること7ヶ月。そして7月21日宇

品港より釜山港に上陸。朝鮮半島を鉄路縦断現中国北部の正定県に駐留することとなる。此の頃には支那事変の戦況は進攻作戦も終わり、後の治安維持と北支方面のゲリラ隊の八路軍のテロ行為の警備等が任務で、時には工兵隊本分の道路補修や橋の補強作業等が仕事であった。そして此処での駐留は7ヶ月であった。次に中支の除州市へ移駐となり、此処では工兵隊独自の所有する器具資材の補修改造等の作業が主たる任務で、偶に治安警備に付く程度で、此処での駐留も5ヶ月であった。又転進で、次は黄河河口の当時の昭和島に駐屯することとなり、此処でも除州と同じ作業が続く日々で、昭和18年を迎えた。少し余裕が出来たので、此処での日曜日には外出が許され、上海の市街の映画館へ映画を見に行ける日もあった。そして月日が過ぎ、10月初旬に次の進駐地の指令が出た。其処は太平洋南海の孤島ニューブリテン島に決まって、即今まで補修強

化して来た諸材及び食糧、戦闘機材等を輸送船へ積み込みのためウースン港へ運ぶことになり、連日運搬の日が続いた。其の間に輸送船団の規模が組成された。その組立は輸送船四隻、護国丸・日枝丸・清澄丸・粟田丸の四隻に、護衛艦に駆逐艦二隻、巡洋艦二隻、海防艦一隻の船団になった。自分等工兵隊は護国丸に乗船することに決まり、持って来た諸材の積み込みをはじめ。そしていよいよ出港の日が10月20日となった。これで中国での駐留17ヶ月が終わった。

## 二、輸送船の海上12日間の旅に

そして、20日の夕刻ウースン港を出港して、東支那海を南下して二日ほどの航海だったと思つた頃、夕暮れに突如艦内放送で「海軍乗組員直ちに部処に着け」との命令に、甲板で激しく海軍が部処に着く足音が騒々しくなった。船の揺れも大きくなり、陸軍は船室で転げる程の揺れが続いた。その頃、丁度陸軍は船酔いで酔魔に襲われていたが甲板へ上がれず、只船室で嘔吐に苦しんでいたが、尚船は蛇行を続けていた。因みに陸軍が甲板に上がれない理由は、ウース

ンを出る時船の副長より「甲板は海軍の戦場で汚さず邪魔されずの場であるので、輸送中は陸軍に守ってほしい」との通達があったので甲板へは許可なく上がることが出来なかった。そして何時間かのち船は安定になって、尚南下を続けているうち2日になった。トラック島に寄港することになり、此処で燃料、其の他の補給のため、一泊することになる。そして其処で見たのは彼の日本海軍の誇りと言われた戦艦大和の勇姿だった。そして此処で初めて聞いたあの東支那海での異状は、船団の一隻粟田丸が台湾東方の海上で米潜水艦の魚雷を受けて残念に沈没したということだった。そのことを聞いて改めて太平洋戦争の悲惨を痛感した。そして翌日トラック島を離れ、尚南下すること二日。又日枝丸が敵空軍の機銃弾により甲板上で若干の被害を受け、ニューアイルランド島に一時寄港することになった。あと二隻でラバウルに向けて航行。遂に11月2日に目的のニューブリテン島ラバウル港に入港。以上12日間の太平洋上の犠牲と被害の航海を終えて陸上の陸軍となって任務に服することとなる。

### 三、ニューブリテン島の17ヶ月

そして、上陸後3日より積み込んだ諸材の陸揚げ作業に入り、4日の昼前には敵空軍の警報があった。退避体制に入るも、海岸でまして上陸2日目と土地の防空壕も少なく、右往左往のうちに上空に飛来、雲間より急降下銃撃により一瞬のうちに、多数の犠牲者と負傷者を出した。航海中幸い二隻は被害無く、無事上陸して初めての悲惨を受けた。勿論我が空軍も、高射砲攻撃に対戦するも機数の多さに残念に損傷を己むなくされた。因みにこの敵機数約二〇〇機。そして4日の午後は、当然被災者の屍の始末処置等を涙して収拾して、その夜は宿営で追悼を行った。尚5日も作業を続けて漸く終わり。輸送船は直ちに引き返し帰行した。そして引き揚げた器材機具の整理を終え、次の進駐地の命を待つこと4日。11月10日に進駐命令で、島の約中央部に当たるガブと言う基地へ行くことになり、海路駆逐艦で進駐。そこは島の北側にある基地で、任務は其処から南への横断道の建設作業である。その頃には島の南東部にあるソロモン諸島のブーゲンビル島のタロキナまで、敵軍の上陸戦の交戦

が続いていて、建設が急がれていた。早速作業に係ったが建設機材が不備なので進捗が鈍く、天候にも悩まされながらの作業であった。その頃にはソロモン地域の戦況は日増しに撤退の一途の様子で、心身共に疲労する中、時が過ぎ18年の幕も開けた。19年を迎え戦況厳しい中にも、新年の印に餅入りの雑煮が出された。作業交代で二日の休みを得て尚続けるが、戦況は益々厳しくなり、前線の守備隊も己むなく撤退。遂に2月になり、方面軍司令部より「此の地域方面軍兵士は全員ラバウルへ転進せよ」との命により、今度は陸路の行軍となるが、道は原住民の作った道なので、どの程度の道か把握もない行軍を始めた。出発する時点では、各隊で分隊単位で組んで出発したが、月日を重ねる毎に疲労が出て来て、徐々に落後兵が出始めた。各部隊で組成されたメンバーの乱れが出る様になり、統一した行軍が出来なくなり、指揮系統も取れなくなり、各部隊共単独行動の状態になった。従って衛生兵も階級格差もない状態になり、まさに無法行軍になった。行軍は続くも、弱体兵は路端に倒れて逝く友、苦しみを訴える友、病魔におかされ苦しむ者等を路端で、休

息場所で見かける日々が多くなった。時には息絶え絶えで水を要求する友もあった。水筒の残り少ない水を与えると、其の場で逝く友を見ながらも、自分も極度の疲れで如何様ともしがたく、只見過ごして行く罪悪感を忍びながらの悲壮悲惨の現実を見て、「戦争」という人間にとってこれほどの罪悪を、なぜ行うのだろうと憎しみながら尚も進む。その頃には各自の持っているはずの装備の品、銃背囊弾薬等は捨てて、最悪の時の手榴弾2個のみの軽装になるも、尚変わらぬ生き地獄の行軍が続いた。月日重ねること2ヶ月近くなった。4月半ばに遂に里程500キロのラバウルに着くことが出来て、達成感から自分はマリア熱により野戦病院に入院すること2週間、漸く我に還った気がした。そして原隊に復帰して、最後のラバウル攻防戦に備え、敵対陣地の補強作業に付くが、敵機が日常飛来して機銃攻撃を受けながらの作業であった。当時のラバウルは対空戦の機能は低下して、制空権は敵にも作業に従事するうち、時も過ぎて、19年も暮れ一九四五年を迎えた。それぞれの各部隊でも必要な作業を続け、ある部隊では長期戦に備えて、

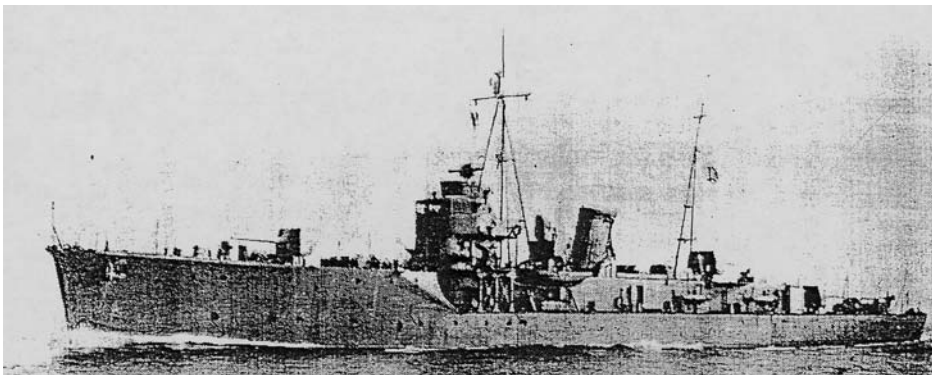
山を開墾して陸稲を植える作業に係る部隊もあり、ラバウル近在の駐留部隊一丸となって防衛作業に取り組んだ。そのうち8月になり、ある日より、連日飛来していた米軍機が来なくなり、不審に思ってた戦友と話し合っていたとき、16日正午に営処に集合の連隊長の通達があり、終戦を知りましたが、内容は無念の敗戦だった。その報を受け、将官の幾名かの自決もあったが、司令部より、「その心境は解るが、心沈めて今の生存者が一人でも多く祖国へ生還して、復興の為、努力してほしい」との通達があり、冷静に戻り捕虜に甘んじることとなった。

### 四、そして捕虜生活から復員まで

捕虜生活に入る前に、敗戦の掟で武器弾薬及び装備品一切の引き渡しを、敵の指定された箇所集積することになり、その作業を終えて身辺の整理も整えて、9月に入り敵軍の指揮下に従事することになった。因みに此の時点でのラバウル在駐の日本軍は約二万名。それを四集団に分割して場所毎に集団村を作り、宿舎の建設の手伝い作業。宿舎が出来て日本軍の配分がなされ、指定され

た集団に分宿することになった。そして一段落してよいよ捕虜生活になり、日曜以外殆ど米軍の指示により、色々の作業に従事すること、3ヶ月が過ぎ、一九四六年を迎えた。

(作業の詳細は苦楽様々で記事には不可能なので割愛します。) 尚作業は依然続くが、ある時点から米軍の許可により、日曜の夜に集団毎に慰安会が出来る様になった。それぞれの集団で趣向をこらして演芸会を催すことになり、実施される夜にはその集団へ観賞に行くと、米軍も一緒に観賞する風景が見られる様になって来た。でも捕虜には違ひなく、連日の作業を指示され従う日が続いた。そして昭和20年も終わり、21年を迎えたが、変わることなく生活は続き4月になった。すると、ある日何処からか近いうちにラバウルに引き上げ船が来るらしいと言うニュースを聞いて、戦友と互いに話し合っているうち、本当に18日に来ることが通達され、20日に乗船と決まった。いよいよ母国へ復員だと思いい、即集団周辺宿舎の整理清掃、身辺等の始末を日本軍人の汚点を残さず、誇りを残すため、完全に終えた。20日の午後引き上げ船隠岐に乗船、憎しみの島ラバウルを離れ、祖



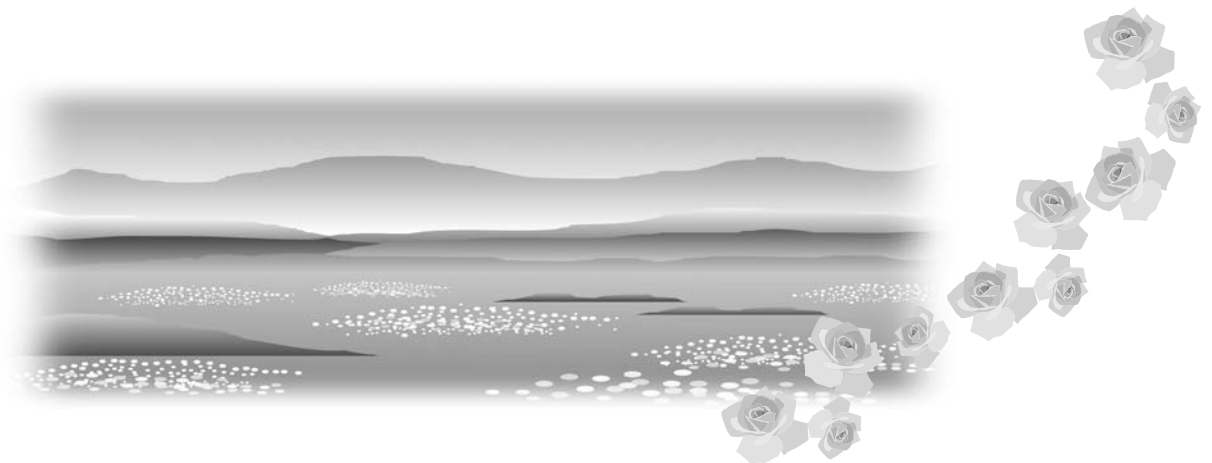
工兵第十七聯隊復員船 海防艦「隠岐」 870Wt 19.4k 昭和21.4.21.ココポ出発、4.30.浦賀到着。本艦は昭和22.8.青島にて賠償として中国国民軍に擧取され「長白」と改名されたが、後に中国軍に移る。

国へ北上航海の途についた。因みに帰路の航海中に見た希な情景を、一筆だけ記させて頂きます。それは太平洋でしか見られない現象ではないかと思えます。航海中、ある日は一日中何も見えず、ある日は小島の並ぶ日、又地球の丸い球儀を確認出来る日は、見渡す限りの大海原で、水

平線の彼方から何か見えて来たと思つて見ていると、徐々にその影が大きくなり、やがてそれが船になる様などは、近海で見ることの出来ない情景ではないかと思ひ、又、夜の海は夜光虫がきらめき「今に例えれば、緑色のダイオード」の光を見ている様な海面を眺める夜もあつたことを思い出しました。話が外れて失礼しました。そんな楽しい安全な航海を10日間の船中で様々懐古のうちに、懐かしの母国の浦賀港に着いて、離国四年余りの上陸に感涙して、免疫を終えて5月3日、故郷への列車に…。

#### あとがき

以上、記述に記し難い事項もあり、自分の体験は、当時の全戦域のほんの一部に過ぎないと思ふとき、改めて戦争ほど人間にとって残酷非道は無いという事実を重ねて、後世に訴え、此の平和の根源の現憲法九条を固守して、広島・長崎の世界唯一の被爆国を忘れず、平和の堅持を過去の一兵卒の願ひとして、恥じらいの記述で終わります。



## 「マジックが良薬」

福寿学園 漢字部 中塚市夫

第26回老人大学の体験発表に貴重な時間を頂きながら、うまくコンペアに乗せられなかった事について深くお詫び申し上げます。

私が、体験発表に出ようと思ったのは、以前、大学祭に作品を提出しておりましたが、年を重ねるに従って提出が出来なくなってきたことにあります。私は、100a程度の耕作農家で、農繁期と作品の提出準備時期が同じ10月で、大変忙しい時期であり、取り入れ作業で体が疲れますので、どうしても提出するのが困難になります。しかし、老人大学祭には、自分なりに何か役に立てればと思いい体験発表に出る決心をしました。

事は廻りますが、以前、病に倒れ、目眩に苦しみ、その後、心筋梗塞と2回に渡り入院、姫路循環器センターの集中治療室での検査結果、幸いにして最終分岐点を通過していたので助かることが出来ました。5ミリ手前であれば冥途行きだったそうです。ストレスは怖いものです。命有るものは、毎日、生死を境に生活しているのだと感じました。後に退院し、家で療養生活を送っていました。自分のやっていた事が分からなくなったり、不安な毎日も過ぎ、家でテレビを見たり、本屋にも出掛け書籍を読んだり、調子の良い時は、グランドゴルフもやっています。

したが、グランドゴルフの会員30名で組織していますが技術的には、皆さんにとっても付いていけず、自分自身不思議と戸惑いがありました。

ある日、雑誌で脳の活性化についての記事を見付けました。数字を並べ、あらゆる組み合わせで頭を活性化させる手法です。少しでも治療になればと徐々にやってみましたが、疲れる日も多く、やったり、やらなかったりの日々でした。ある日、テレビでマジックをしているのを拝見し、3種類程度メモをとりました。これくらいならと種明かしに一生懸命でした。でも、種明かしは簡単に出来るものではありません。暇をみて繰り返すうちに、マジックに興味を持つようになり、資料を入手するのに熱中した時期もありました。種明かしに専念するようになったおかげで、脳の活性化につながり、自分でも少し体調が良くなって来た様に感じました。

次に血圧の問題です。今まで、あまり薬を口にしない私でしたので、薬を飲まずに血圧を正常に出来ないものかと思ひ、誰もが言っている歩く運動は、よく聞いていましたので歩くことにしました。少し続けていましたが、物足りなくなり山登りに変えたり、マラソンをしたりしました。私の集落の西に山田、大沢地域に池があり、マラソンで一回り20分程度かかるコースを見つ

け毎日走り続けました。友人に血圧が高いのでマラソンをやっている事を話すと、血圧が高いのに、しかも、寒い1月にと笑われました。私は、水稲作付け期間は水が流れますので部落内の溝は綺麗になり、水稲作付け期間を過ぎると水が流れにくくなり、青み泥が発生し詰まってしまう。血管も同じ原理だと思つてやっていると伝えても、友人は笑います。しかし、1年余り続ける事により、徐々に改善の兆しも見え始め、山登り、資料集め、マジックの種明かし、マラソンと忙しくなってきました。マラソンは、少し休むと元に戻りますので疲れている時もありませんが、効き目があるとわかった時から、雨の日以外は休まず2年くらい続ける事で、病院からは、もう薬は飲まなくても良いと言われるまでに回復しました。私は以前、酒飲みの看板を掲げるくらい酒好きでした。たまにはと思ひ、酒を口にすると血圧が乱れ始めましたので、やはり、病に酒は禁物でした。

こうして近年は、寒い時期以外は、血圧の心配もなくなりました。マジックの種明かしも10種類くらい出来ました。調べると数値のものが5種類くらい在りますので大変珍しいのではと思ひ発表しようと思ひつきました。しかし、マジックの会で練習した方とは異なり、私は個人的に探し求めたもので、どうすれば良いか、アドバイスを受けるところもなく初体験で戸惑いもありましたが、何とか成るのではないかと披露にこぎつけました。しかし、マジックの会で習った方は潜在的なものがあり、私がやろうとするものは、数

字を諸に出し、慣れない所為もありますが、優れた方の前では大変やりにくいものでした。以前、考えを集中すると、頭に針を刺すような痛みが出て来た事があり、まだ潜んでいるようでこれ以上無理をすると、目眩が起き、皆さんに迷惑をかけてはと思ひ、中途半端となりました事、大変心苦しく思っています。

その後、いろんな方からアドバイスを受けました。そのアドバイスを土台にミニ集会に、1、2種類程度披露し、長い歳月をかけ経験を積み重ね収穫するものだと思います。

健康状態も、良くなっています。現在も、家の近くにある、ふれあい会館からキャンプ場へと山道を歩いています。このコースは、少し丘になっていて、キャンプ場はハウスが10棟建っていますので、私は個人的に「ヒール街」と呼んでいます。これからは、「酒を飲むなら薬が必要。薬嫌なら酒飲むな」を歌い文句に、山登り、グランドゴルフで体を鍛え、マジックで頭を鍛え、楽しい余生にしたいと思います。



# 福崎町文化財探訪記(2)

福崎町教育委員会 出田直

はじめに

平成20年度は福崎町の中でも、文化遺産に大きな光があてられた年でもありました。西田原(北野)の古墳公園の整備や南田原(中島)から町内最古の弥生土器が見つかったことなどが上げられます。

今回は、前回の文化財探訪記の続きから、福崎町の歴史の一端に触れて見ましょう。

探訪記

○月○日 今日は、あいにくの雨模様ですが、雨の中の散策も一味違ったものになります。市川に西岸から東に渡るには、いくつかの橋を利用することになります。今回は、山崎から井ノ口へと渡るために「月見橋」を渡ることとなります。「月見橋」とはなんと風流な名前ではないでしょうか。あの説によると、この橋の前はつり橋で、そこから眺める月が美しかったので「月見橋」と名がついたのではということでした。月見橋の前は、渡し舟があつ

た場所でもありました。

雨に少しぬれつつも橋を渡り終えると、国道の向こう側に一つの石碑が見えます。大きなもので180センチ以上はあるようなものです。花崗岩という硬い石で作られていますので、残り具合もいようです。石碑に近づくと何やら文字が彫りこまれています。この内容を解説したものを参考にすると、「辻川の大庄屋三木家がここにあつた、大岩を崩して溝を作り、下流の村々の米の取れ高が大いに増えました。それに感謝した、下流の9か村の人々が記念に石碑を建てたことが記されています。時に天保十四年(一八四三)のことです。」この石碑は『新渠碑』という名前前で知られています。ここに登場する水路は「堰溝(ゆみぞ)」として知られており、ちょうど生野街道沿いに流れる水路として今でも使われています。

その石碑を過ぎて堰溝沿いに歩いていくと恵美須神社の看板が目に入ります。恵美須神社を目指して進み、井ノ口の公民館横の路地を山に向かって歩

いていきました。山の中腹に舗装された道があり、その道に沿って歩くと恵美須神社につきました。井ノ口の恵美須祭りは、西宮よりも1月遅れで行われますが、「本家に気を使って遅くしているのですよ。」と教えてもらいました。雨も少し強くなってきましたが、

本殿でお参りし次の場所を目指して歩いていきました。中腹の舗装道を下っていくと、井ノ口墓地に向かって左に曲がりました。山のふもとに井ノ口墓地は建てられています。この中に、短歌で有名な岸上大作の墓があることを聞きました。岸上大作は、井ノ口で生まれ福崎高校を卒業した方で、国学院大学での活躍から、多くの人に注目されました。六十年安保といわれた時代を象徴し、当時をうたった短歌は高く評価されました。若くして自ら命を絶つた、岸上大作は今もなお、多くの人に親しまれています。その墓は、井ノ口墓地の中腹に両親の墓と共に並んでいました。黒い墓標は雨によって清められ一層黒く光っていました。その雨は、岸上大作の死を悲しむかのようでもありました。

岸上大作の墓標から南を向くと北野の村が見えます。その前は、ほ場整備によつて整然と並んだ田が見られます。その中に、ひとときわ目立つ形で大きな

塚が見えました。



その塚に行く途中には、先ほどからの雨脚も弱りましたが、農道は水溜りがあり歩きにくい状態でした。大きな塚まで行くと、あたりはきれいに整備されていました。まるで公園のようになっています。奥に進むと看板が目に入りそこには、「東広畑古墳」と記してありました。東広畑古墳公園ということが判りました。説明板からすると、今から1400年前の古墳で丸い形をした円墳ということがわかりました。もともとは、このような形だっただけで、戦後に土が取り除かれて石室がむき出しになってしまったようです。石室も崩壊の恐れがあつて、保存する意味も込めて公園にしたということです。いつもは、石室の中に入れていないようになっていますが、外からでも中の様子が良くわ

かります。握りこぶしくらいの石が敷き詰められている一番奥に四角い石が置いてありました。石棺の一部ということでした。

雨も上がり、傘を閉じつつ歩いていくと目の前の山に緑色の屋根が見えました。「文珠荘」ということでした。

文珠荘の横には、天台宗の古い寺で妙徳山神積寺というものがあるということです。そこに向かって進んでいくと播但自動車道の高架をくぐり細い舗装道を歩いていくと右手に寺の建物が見えてきました。聞くと、悟真院という寺の一つだそうです。この悟真院の唐門も町指定文化財になっている貴重な遺産ということでした。

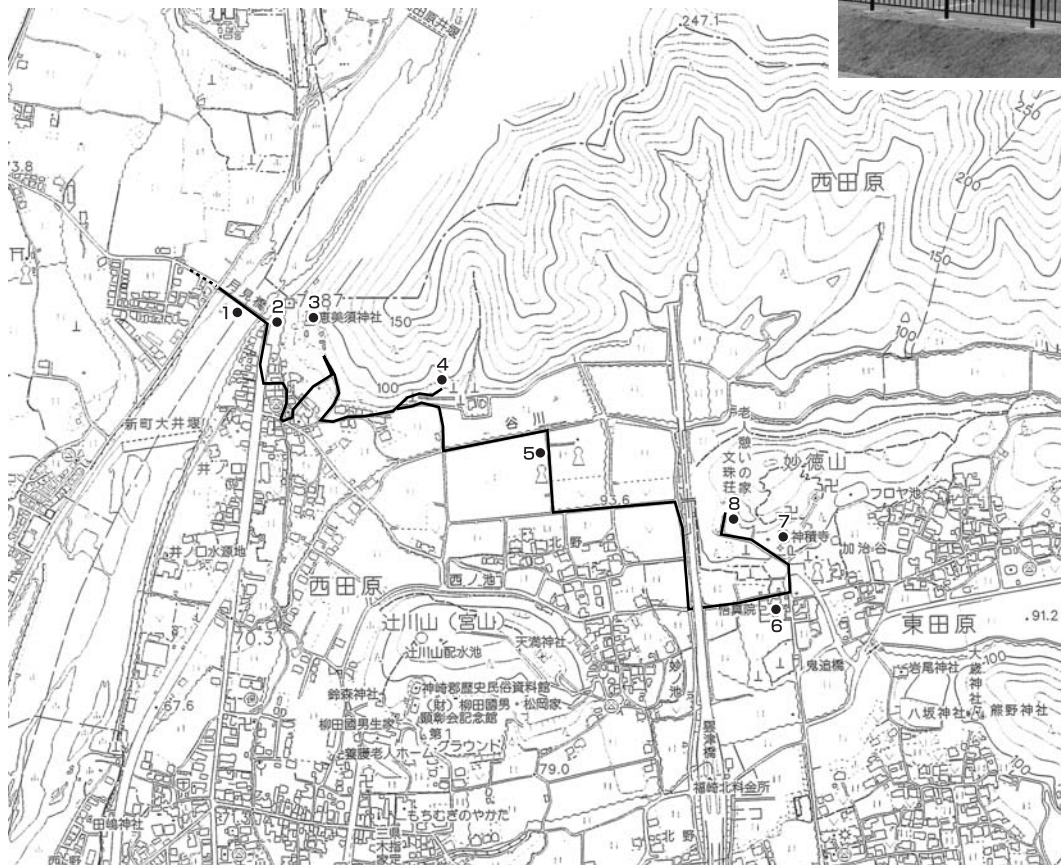
悟真院の東には弁財天を祭つてある弁天堂と弁天池がありました。新しくした弁天堂には、弁天様と15童子が祭られているということです。この池から、文珠荘のほうに行くと、石段が見られます。石段の下には百度石と刻まれた石碑があり、百度参りに利用されるものということが判ります。花崗岩で作られた石段を登り、登ったところにある石灯籠を過ぎると本堂が目に入ります。本堂に行くまでに、石灯籠の横の説明板に目をやると、石灯籠のことが書いてありました。石灯籠は、両親の菩提を供養するために奉納された

ものだということがわかりました。それと同時に、古い石段も奉納されたようです。天和三年（一六八三）のことでした。昔の石段は、

作られてから179年後にお参りしやすくなるために本堂に向かって左側の通路に石段を作り直しました。その後、元あった場所がけのようになりましたが、平成七年に今の石段が作られたということです。

石段の上り口の左側には、阿弥陀如来の梵字が刻んである石碑が見られます。梵字を種子といいそこから、阿弥陀種子板碑という名前で知られています。この板碑の下には、四八文字でいわれが彫られています。それからすると、安喜門院という人の百か日の供養塔ということが判ります。安喜門院は後堀河天皇の皇后で弘安九年（一二八六）に亡くなった方で、天皇とゆかりの強い方ということが判ります。

神積寺には、追儺という行事が鎌倉時代から伝わっており、今でも1月の成人日に古式ゆかしくとり行われ多くの人で賑わいます。また、知恵の文殊としても知られています。



探訪記主要箇所位置図

- 1 月見橋
  - 2 新渠碑
  - 3 恵美須神社
  - 4 岸上大作墓
  - 5 東広畑古墳
  - 6 悟真院
  - 7 神積寺
  - 8 石灯籠
- 阿弥陀種子板碑  
箱式石棺

また、このご本尊の木造薬師如来坐像が福崎町で唯一の国指定重要文化財で、もうしばらくするとご開帳の時期を迎えます。ご開帳のためにも、きれいな仏像になつてもらうために京都に修理にいかれました。その時には、参拝することが出来ることでしょう。

このように、神積寺には多くの貴重な遺産が残されています。

神積寺を後にして、文珠荘に行くと、赤い色をした彫刻が出迎えてくれます。神々の誕生という作品だそうです。その横に、覆い屋が作られている場所があり、のぞくと箱式石棺というものでした。箱式石棺は文珠荘の建設の時に見つかったということです。

その石棺を通して南を向くと、播但自動車道をみながら福崎町のまち並みを望むことになりました。福崎町には歴史的な大切なものが多くありますが、ここから望むまち並みは、都市化の波が訪れている様子がよくわかるものでした。主要道の沿線は都市化していますが、一歩横にそれれば、自然豊かな歴史ある場所がまた多く見られます。

雨の中の散策でしたが、最後には雨も上がりすがすがしい散策となりました。

次回の歴史散策でお会いしましょう。

## 第二十七回 町展作品募集

第二十七回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりおまちし  
ています。

◆会期 五月二十二日（金）～  
五月二十四日（日）

◆会場 エルデホール

◆部門 日本画・洋画・書・写真・  
彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の  
作品に限る

◆作品搬入

五月十六日（土）  
午前九時～午後四時

◆審査員

日本画	青田 賢蔵
洋画	門脇 正弘
書	井上 映粧
写真	北村 泰生
彫塑・工芸	牛尾 啓三



## 山桃忌奉賛 第二十四回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を忍ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家顕彰会により山桃忌が行われています。

短歌会は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌当日行っています。

本年の短歌会は、左記の要領で作品募集の予定です。

記

日時 平成二十一年八月上旬  
場所 柳田國男・松岡家顕彰会  
記念館二階

主催 福崎町文化協会・福崎短歌会

作品 未発表のもの・一人二首以内  
応募料 一首につき五百円  
現金または小為替

要領 原稿用紙に楷書で縦書き

宛先 福崎町文化センター内  
文化協会事務局 宛

締切 平成二十一年六月十三日

賞 通泰賞・町長賞・議長賞・  
教育委員会賞・顕彰会賞・  
文化協会賞・商工会賞・J  
A兵庫西賞・神戸新聞社賞  
の各賞と佳作数点

選者 楠田 立身 先生  
(兵庫県歌人クラブ代表)

## \*表紙の写眞\*

東広畑古墳

平成20年度に古墳公園として完成しました。今から約1400年前に造られた古墳で横穴式石室を持ちます。直径16m、石室長10.4mです。中には、石が敷き詰められた床面があり、石棺の底石も残っていました。当時の供え物であった、土器や勾玉などが見つかりました。地域の歴史遺産を大切に守っていきましよう。

## 編集後記

たくさんの方々のご協力により、第二十五号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には、大変お忙しい中を、快く執筆、ご協力くださいまして、本当にありがとうございます。皆様方に、心からお礼申し上げます。